

### 第3章 「気になる子」が 溶け込む学級づくりの 「基本ステップ」 概論

現代に生きる子どもたちは、家庭や地域におけるかかわりの機会が減少しています。そのことが、子どもたちの自尊感情やソーシャルスキルの乏しさにつながっているのではないかと私は考えています（第7章で詳しく述べます）。そして、自尊感情の乏しさゆえに周りを攻撃したり、ソーシャルスキルの乏しさゆえに周りとうまくかわれなかったりする子どもたちが多く在籍する現代の学校現場は、「気になる子」にとっては非常に居心地が悪くなっているのではないかと推察されます。

私が子どもの頃にも、学級に「気になる子」はいましたが、私をはじめ「周りの子」が「気になる子」の状況を理解し、おかしなちょっかいをかけず、うまくかかわっていたように思います。それは、休み時間、放課後の遊びなどを通して、彼らのことを身をもって理解したことが、よりよいかかわり方につながったのではないかと、子ども時代を振り返っています。

今、全国各地の学級で、「気になる子」の存在がクローズアップされるのは、その子の問題以上に、周りの子のかかわりの力不足にある…、私はそのようにとらえ、「通常学級でできる特別支援教育とは

学級づくりである」と声を大にして研修・講演を行っています。

以上のことから、第Ⅱ部では、まず学級経営の核である「学級づくり」に焦点を当てます(第4章)。そして、そこで説明する3つの「基本ステップ」を補足する形で、第5章では「教室環境づくり」と「保護者との関係づくり」に焦点を当てて説明します。

私自身の経験、および全国各地で参観した学級の状況をすり合わせ、「これだ!」と納得し、最も「歩きたい!」と思える道が、私にとっての「王道」。そうやって私がこれまで歩いてきたなかで紡ぎ上げてきた「理論」と「技法」があります。それらが、表1の『『気になる子』が溶け込む学級づくりに役立つ10の理論と10の技法』です。ここまでの章でもいくつか紹介しましたが、これらの理論と技法は、第4章、第5章の学級づくりや教室環境づくりなどの具体的な説明のなかに織り込まれています。

表1 「気になる子」が溶け込む学級づくりに役立つ10の理論と10の技法

* 理論	* 技法
理論1：ハンカチ理論	技法1：アイメッセージ
理論2：2本のアンテナ理論	技法2：勇気づけ
理論3：泳力&浮き輪理論	技法3：?の問いかけ
理論4：機織り理論	技法4：リソース探し
理論5：グローブ理論	技法5：リフレーミング
理論6：穴の空いたコップ理論	技法6：例外探し
理論7：現実の打ち出の小槌理論	技法7：S S T (ソーシャルスキル・トレーニング)
理論8：引き分け理論	技法8：S G E (構成的グループエンカウンター)
理論9：豆まき理論	技法9：ジョイニング
理論10：軌跡・奇跡・輝跡理論	技法10：サバイバル・クエスチョン

本章では、3つの「基本ステップ」の概論の説明と、その前に、まず「地盤」と「ゴール」について述べます。

## 「基本ステップ」の前に踏み固めておく「地盤」 ：あきらめない、見捨てない覚悟

「気になる子」が溶け込む学級づくりの「基本ステップ」を踏む前に、現代に生きる子どもたちの状況を鑑み、踏み固めておきたい「地盤」があります。それは、かかわる「気になる子」を含むすべての子どもたちを「あきらめない、見捨てない覚悟」です。

私は今、教職課程を履修する学生に講義やゼミで指導をしています。学生たちと話をしていると、「子ども目線から見た教師の立ち居振る舞い」が話題になることが多くあります。そうした話題の1つに、「あっ、先生は今、私のことをあきらめた、見捨てた」という瞬間がわかった、というものがありませんでした。その発言をした女子学生は、中学生の頃、不安定な家庭環境と思春期特有の心と身体のアンバランスな状況が重なり、担任に対して常に反抗的な態度をとっていたそうです。担任にはひどいことをしたということが今ならばわかるが、当時は自分のことだけで精一杯で、担任の気持ちなど考えてもいなかった、とも話していました。

教師の働きかけをしっかりと受け取って、笑顔あふれる学校生活を送る子どもたちも多くいます。そのようなよい状態の子どもたちの指導・支援であれば、きっと教育実習の学生でも十分にやり遂げることができるでしょう。しかし、私たち教師は「教育のプロ」です。よい状態の子どもたちの指導・支援ができるのは当たり前。学生との違いは、どのような状態の子どもたちを前にしても、「あきらめ

ず、見捨てず」子どもに向き合い、手を引いたり、背中を押ししたりすることができること、私はそのようにとらえています。

先の女子学生の例であれば、担任は「心が折れた」のかもしれませんが。教師の誰もが鋼鉄の心を持っているわけではありません。それゆえにこそ、子どもの指導・支援に悩んだり、迷ったりしたときには、管理職や同僚への「ヘルプコール」が必要です。周りからのサポートを受けながら「あきらめない、見捨てない覚悟」で子どもに向き合っていく。子どもが担任の私たちを認めず、相手にしないという状況だったとしても、私たち教師は子どもを学級の一員と認め、向き合っていく…。以前に比べ、人としての育ちの弱さが見受けられる子どもたちを前にする私たち教師は、今やこうした「覚悟」を問われているのではないかと感じます。

覚悟のブレやぐらつきを抑える「補強工事」として、私自身がこれまで行ってきたのは「先輩に学ぶ・本に学ぶ・研修に学ぶ」ことです。いかがでしょうか、一緒にさまざまな「補強工事」をしませんか？

